泣いた！笑った！in途上国

～笑顔のご褒美～

平成10年から12年に「青年海外協力隊」の理数科教師として、フィリピンに派遣されていた千葉恵市さんに、現地での体験について書いて頂きました。フィリピンでたくさんの思い出を作ってきた千葉さんの貴重な体験をお届けします。

新卒の私が、高校物理の先生に教えることなんてできるのだろうか？そんな不安を抱きながら出発したのが1998年７月。ついたところは北緯７度、頭の真上から太陽が照りつける常夏の国、フィリピンのダバオ市でした。明るく陽気なフィリピン人。たくさんのおいしい果物ときれいな海に囲まれ、まったく別世界での２年間でした。

私は理数科教師としてアテネオ･デ･ダバオ大学地方理科教育センターに配属となり、その地域の高校物理の先生へ対する、物理実験指導が主な活動内容でした。早速いろいろな学校を訪問し、現地で行われている授業を参観して歩きました。１クラス60人。教科書はクラスに５冊ほど。実験室はあっても、器具がほとんどない。こんな環境の中でがんばっている現地の先生。いったい自分になにができるのかわからなかった。半年ほどの教育現場の見学を通して、現地の先生と一緒に授業をするチームティーチングをしてみようと思いました。現地で身の回りにある木や石、ペットボトルや空き缶などを使って、教材を準備しました。生徒は

授業での風景（中央：千葉さん）

大喜びで実験の授業に参加してくれ、先生も実験準備段階から協力してくれました。ある日、一緒に授業していた先生が病気で入院してしまい、私がその先生の替わりに毎日４クラスの授業をしなくてはいけなくなりました。とても私の語学力で80分をしゃべりだけでの授業をする自信はなかったので、毎日実験を中心とした授業をすることにしました。しかし、毎日授業をして次の日の実験準備をするのはとても大変なことでした。くたくたになっていたころ、１人の生徒が、“先生の授業はとてもおもしろい。準備とか大変だと思うけどがんばってね。”といってくれ、涙が出ました。心が通じたと思いました。その後もたくさんの生徒たちと先生にふれあうことができ、いい経験となりました。

このフィリピンでの経験をいかし、今度は日本で教壇に立ちたいとおもっています。全く周りの環境がちがうフィリピンと日本の子供たち。でも、笑顔はおなじ。たくさんの子供たちと心からの笑顔を共有したいと思っています。

クラスの生徒に囲まれて（右：千葉さん）

平成12年度 国際協力連絡協議会

さる10月４日、第２回国際協力連絡協議会が委員15団体20名の参加を得て、北海道国際センターで開催されました。今回の会合では、開発教育の促進並びに研修員受入れ事業の改善について検討するべく、それぞれ「途上国理解を如何に進めるか」（分科会１）及び「研修員受入事業の質的改善」（分科会２）と分科会形式で、協議を行いました。

その結果、今後北海道での国際協力推進並びに当ＪＩＣＡ国際センターと自治体やＮＧＯ等関係者との連携促進の必要性が再確認されると共に、「実のある交流事業として国際協力を推進している各自治体においては、地域住民の理解を得る必要があり、国益としてより身近な市民生活に影響し得る問題として国際協力をアピールする必要がある」等、極めて示唆に富む提言が出されました。

マスコミ関係者の 国際協力現場視察

国民の皆さんに、国際協力事業への関心と理解を深めていただく一助とするため、毎年ＪＩＣＡでは各地方を代表する新聞社の記者あるいは編集委員に、広く国際協力の現場を視察していただく機会を設けております。

今年度、ＪＩＣＡ北海道国際センター（札幌）では、北海道新聞社の日浅尚子編集委員に、15日間にわたって、お一人で南部アフリカのジンバブエと南アフリカの現場を視察していただきました。視察先の決定にあたっては、日浅さんが日頃深い関心を寄せておられる飢餓、貧困、疾病、民族対立などの深刻な問題を抱えている南部アフリカから、上記２カ国を選定しました。

海外経験の豊富な日浅さんは、10月24日に札幌を出発し、南周りでジンバブエの首都ハラーレに到着。国内の取材を行い、続いて南アフリカの大都市ヨハネスブルグへ移動、各事業地を視察のうえ11月６日、往路と同じく南回りで、ハードスケジュールの疲れも見せず無事帰札されました。

国際協力事業団（JICA）　北海道国際センター（札幌・帯広）
札幌／〒003－0026　札幌市白石区本通16丁目４番25号　TEL：011－866－8333
帯広／〒080－2470　帯広市西20条南６丁目1－2　TEL：0155－35－1210